

平和聖日礼拝説教「帰るところがありますか？」

日本基督教団石神井教会 2017年8月6日

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 5章14節～6章2節

5¹⁴なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。15その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。

16それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。17だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。18これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。19つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。20ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。21罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

6¹わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にはいきません。2なぜなら、

「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。

救いの日に、わたしはあなたを助けた」

と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

【福音書日課】マタイによる福音書 9章9～13節

9¹イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。10イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。11ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。12イエスはこれを見て聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。13『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

「平和聖日」の祈り

8月を迎えました。この国に生きる者として、殊にわたしたちキリスト者として、世代を超えて、特別な祈りへと向かわないわけにはいかない季節です。今年には特に、「広島原爆の日」を日曜日に迎えました。広島に原爆が投下されたときから17年後の1962年、その被爆地に立つ広島教会で行われた日本基督教団西中国教区総会で、教団が8月に「平和聖日」を制定することを求める決議がされました。これを受けて、日本基督教団は「平和聖日」を制定。翌1963年から、教団の教会は、毎年8月第一日曜日を「平和聖日」としておぼえ、特別な祈りをささげる日としてきたのです。その祈りの営みも、半世紀を超えて続けられてきました。それは、ただ過去の戦争の惨禍を思い起こして慰めを求めて祈るということにとどまらないことであつたでしょう。主イエスが「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5:9)と宣言なさったことを心に留め、わたしたちキリスト者が平和を造りだす者としての自覚を持ち、その使命を果たしているのか、また、教会がそのような平和を世に示す器として形成されているのか、そのことを問われる祈りの営みであつたのだらうと思います。今日、わたしたちは、そのような祈りの営みの中で、御言葉を聞くのです。

今日の福音書で、主イエスは、マタイ(他の福音書では「レビ」と呼ばれる)という徴税人の男に「わたしに従いなさい」と呼びかけられて、弟子になさり、続いて、その男の家で食事をなさっています。主イエスは、もちろん、毎日どこかで食事をなさつたのでしょう。お一人で断食をなさることもあつたかもしれませんが、弟子を集めてお連れになられるようになってからは、少なくとも弟子たちに断食をさせていらっしやらなかったようですから、弟子たちと共に食事をきちんとなされていらしたのに違いありません。ですから、それは日常のごくありふれた出来事であつたのでしょうけれども、福音書は、そのありふれた食事の出来事を、時に意図的に伝えようとしているのです。

主イエスは、この後、ご自分の弟子を二人一組にして宣教に遣わされますが、そのとき、遣わされて行った先で、どこかの家に留まるべきこと、そして、その家がふさわしければ弟子たちのもたらした平和がその家に与えられるだろうということを告げられています(10:12~13)。弟子たちにそう命じられたということは、主イエスご自身がどこかの家に入られて滞在なさったときにも、当然、そうなつたということでしょう。主イエスがどこかの家に入り、そこに泊まり、食事をなさる。その家が、その主イエスを受け入れたならば、その家には主イエスの平和が与えられる、平和がある、のです。

マタイの家にも、もちろん、主イエスの平和が与えられたことでしょう。いいえ、主イエスは、マタイの家に平和をもたらすためにこそ、その家に入られたのでしょう。その家で、マタイの家族や、マタイと付き合いのある人々と食事をなさつたのでしょう。周囲から「あいつらは徴税人だ、罪人だ」ときさやかかれ、食事の付き合いを拒まれていた人々と、主イエスは食事をなさつたのです。それが、主イエスがその人々の家に平和をお与えになる方法でした。

主イエスが食事をなさる家

マタイという弟子は、もしかすると、このような食事を主イエスが繰り返しながらおつもりで呼び寄せられた弟子だったのかもしれませんが。弟子は他にもいました。あの一番弟子のペトロの家にも、主イエスは滞在し、そこに集まってくる人々に教えたり、癒しをなさったりということがあったようです。しかし、マタイは、弟子たちの中でも特別でした。何と言っても「徴税人」という、当時のユダヤ人社会の中で最も嫌われていた職業についていた人でした。「罪人」と呼ばれるような人と同類、とみなされていた、「はぐれ者」だったのです。彼らは、まっとうな生活を送っている（と自負している）ユダヤ人から見れば、一緒に礼拝をすることができない者たちでした。神から離れている、神の御言葉とは縁遠い生活を送っている連中だとみなされていたのです。そして、事実そのように日々扱われて、彼らもまた、神をおぼえて祈ることから遠のけられ、御言葉を聞く機会はますます少なくなっていく、という悪循環が起こっていたことでしょう。そういう連中は、ペトロの家さえ敷居が高かったに違いありません。しかし、マタイの家ならば、彼らは集まって来れたのです。祈るためではなく、御言葉を聞くためでもなく、徴税人である主人と食事をするためならば来ることが出来る人々が、マタイの家には集められたのです。マタイは、まさに、そのためにこそ、主イエスの弟子としてお呼び寄せになられたのではないのでしょうか。

主イエスは、マタイをお用いになられて、マタイの家ならば集まってくる事が出来る人々を、ご自分のもとにお招きになられたのでしょうか。それは、しかし、マタイ一人のことではなかったと思います。主イエスは、弟子たちの教会が歩み始めると、その中にマタイと同じ使命を担わされる者をお呼びくださり、教会がマタイの家と同じ働きをなすことができるようにしてくださったのです。今日に至るまで、教会の中には、主イエスのお望みのままにマタイの働きを担う者が立てられ、マタイの家の働きがなされてきたのです。

けれども、それは、やはり大変なことなのだと思います。大きな決断を要すること、覚悟を決めて取り組まなければいけないこと、なのです。実際、わたしたちの本心は、主イエスのなさったことを批判したファリサイ派の人々に近いものに違いないのです。彼らは、言うのです。「どうして、あなたたちの先生は、安息日に会堂に来もしない罪人や徴税人に、教えたり戒めたりするのではなくて、飲んだり食ったりと食事をするばかりなのか！」。

このときだけでなく、主イエスは繰り返し、同じような食事を持たれたのでしょうか。マタイの家で、あるいは他の家で、「徴税人や罪人」と呼ばれるような人たちが集まれる食事の場を設けられたのでしょうか。その様子を見て、主イエスのことを「見ろ、大食漢で大酒飲みだ」(11:19)と揶揄する人たちもいたのです。それでも、主イエスは続けられたのです。それが、主イエスのお働きの大切な一部、否、そのお働きの核心を突く営みだったからです。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

しかし、その「罪人」のあり様を、主イエスは厳しくご覧なのかもしれません。

「さあ、主のもとに帰ろう」

「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが求めるのは憐みであって、いけにではない**」と、主イエスはお告げになりました。これは、今日の旧約聖書日課として定められているホセア書 6 章あたりからの敷衍です。

ホセアは、紀元前 8 世紀、南北に別れていたイスラエルの北王国がアッシリアによって滅ぼされていく時代に、活動した預言者です。しかし、彼が有名なのは、その預言活動によってというよりも、その妻ゴメルの存在によってかもしれません。ホセア書によると、ホセアはゴメルを妻として迎えるのですが、彼女は不貞の女で、要するに繰り返し不倫に走ったのです。ところが、ホセアは、彼女を繰り返し繰り返し自分のもとに迎え入れます。神にそのように命じられたからです。彼女が生んだ、誰が父親かわからない子を、自分の子として迎えるようにとまで、神に命じられ、ホセアは、そうするのです。それは、ホセアの夫婦関係を通して、神がご自身とイスラエルの民との関係をお示しになられるためだったのです。

イスラエルの民は病気となり、ユダの民は傷を負っている。その病気や傷のいやしを、イスラエルはアッシリアに、ユダは大王に求めているが、それは間違っていると、ホセアは預言して語ります。病や傷の癒しは、主なる神に求めるべきではないか。世の力あるものに頼るのではなく、主なる神にこそ頼り、主のもとに立ち帰るべきではないか。そう告げるホセアの預言に対して、イスラエルの人々、ユダの人々は、応えて言うのです。「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたが、いやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる」(ホセア 6:1)。ようやく、イスラエルの人々も、ユダの人々も、悔い改めて、主のもとに立ち帰る決心をした。そう思える言葉が並んだ後で、ホセアは、しかし、主の戸惑いの御言葉を告げるのです。「エフライムよ、わたしはお前をどうしたらよいのか。ユダよ、お前をどうしたらよいのか。お前たちの愛は朝の霧、すぐに消え失せる露のようだ」(ホセア 6:4)。悔い改めの言葉さえ、まったく当てにならない。助けを得るための口先の悔い改めなど、何の役にも立たない。わたしたち人間の唇の語る悔い改めなど、その程度のもの。悔い改めさえ偽る。それが、わたしたち人間の「罪人」の姿なのだと、ホセアは預言して告げるのです。

しかし、ホセアの預言は、それで終わらないのです。そのような人間の姿、悔い改めさえ偽る、どうしようもない人間の姿を、すべてお分かりの上で、にもかかわらず、主なる神は、なお、人間をご自分の愛のもとに迎え続けられる。「わたしが喜ぶのは、愛であっていけにえではなく、神を知ることであって、焼き尽くす献げ物ではない」(ホセア 6:6)とお告げになられて、ご自分のもとに置き続けてくださる。それが、ホセアの伝えた、主なる神の愛なのです。

使徒パウロは、「神と和解させていただきなさい」と勧めました。わたしたちは、あの罪人らの食事を設け、招いてくださった主イエスによって、その愛と和解の御手の働きを知る者とされたのです。その御業を記念して、聖餐にあずかります。罪人の招かれた食事、聖餐にあずかる者にふさわしい平和の使者として、教会の営みを担い、また世の働きへと出で行くのです。